平成 16 年 12 月発行　発行者　砺波カイニョ倶楽部　代表幹事　柏樹直樹
事務局　富山県砺波市表町 14-10　電話　0763－33－6588　　天野一男建築工房内

これからの「カイニョ」に 53 名参加
台風被害と対応に大きな関心

12 月 11 日（土）午後　砺波市文化会館研修室で「これからのカイニョ」―屋敷林を考える集い―を、カイニョ倶楽部とミュージアムを考える会開催で開いた。53 名が参加したくさんの意見が出された。

はじめに柏樹カイニョ倶楽部代表幹事が挨拶したあと、橋本武志さん（ミュージアムを考える会幹事）が、開催までの経緯と台風で自宅のカイニョの倒れた様子を情感を込めて報告。あと天野一男さんの司会で岡本晃一さん（被害住民）、尾田武雄さん（考える会）、和田健さん（屋敷林研究家）、柏樹直樹さん（カイニョ倶楽部）が 23 号台風とその受け止め方や対応作について報告、会場からの意見と会わせ、約３時間の話合いを終えた。

話題提供者の主な内容は次のとおり。

（岡本晃一さん）

・高木で 116 本のうち台風で 57 本に被害が出た。建物の破損もあった。
・これも一つの災難と思い受け止めている。カイニョはブナだと思う。息子の嫁が森林浴ができると喜んだことに新しい力をもらった。
・倒れた跡にスギ以外の木も植えたい。風に強く時代にあったカイニョにすればいい。
・スンバも風情だし、人の目を気にせんとカイニョとつきあうことも大事ではないか。

（尾田武雄さん）

・ミュージアムを地元にあった地元の人が喜ぶものにしてほしいと思い、会を作った。む一時編むは学校であり、寺であり、その寺には信頼される僧がいて活動することが要だと思う。
・台風で 400 年の大木が倒れた。大変なことだし、それを冷静に●●●記録しておくことが手伝いだと思い二日間ほど倒れた木の姿の写真を撮り歩いた。
・今考えていることはカイニョのない者はどんな手伝いをしたらよいのか。募金でもやれないか。またボランティアを募り協力できないのか。

（和田健さん）

・風倒木は「モメル」ため、材としての価値は落ちるのが一般的だが、製材してみないとわからない。
・風倒の要因はいろいろあり事例を細かく調べることだ。
・台風 23 号の特徴として、以下の５つが考えられる。①瞬間風速 40～45mはあった。②建物の存在が風の流れを変えた。③土質が影響。④風と雨が同時に長時間続いた。⑤コンクリート等で根元を痛めたところの倒木が多い。
・これからの参考として木の性質を考えた植え付けや組合せをすること。根の浅いものとしては、ヒマラヤスギ、カラマツ、トウヒなどである。深いものは、マツ、イチョウ、モミ、ヒバ、スギ。根張りの強い者はシラカシ、ケヤキなどである。
・倒木の整理も色々あったが、全体的に自力で始末するちからは弱くなっている。
・これからの屋敷林との付き合い方として落葉も美しいというとらえ方や、雪はスンバを落とす自然の恵みとみること等、カイニョを自然体の姿とみることも大切。

（柏樹直樹さん）

・台風で「全てカイニョは伐る」、「木は植えない」という人が多くなったが、その深部にせまる話や交流が必要。
・伐根の始末も急ぐな。そのままにして土に返すつもりで年寄りの楽しみの場にしておくのもよい。
・カイニョと付き合う心得が必要だ。
　●生きものの総合的なすみかだ。
　●生きものと付き合うことは、必ず「わずらわしさ」、「苦痛」、「ゆずりあい」がつきまとうもの
　●毎日休まずカイニョは恩恵を授けてくれている。これを忘れるな。
・元気なカイニョをつくるには・・・
　●大・中・小の木の組合せを考える。
　●樹齢の差のあるものを作る。
　●植え付けは直線にしない
　●排水を良くし、勾配のある場がよい。

スギのカイニョでなくていいじゃないか

ー会場からの発言の要旨ー

・スギ中心のカイニョの目的は終わったのではないか。花木・果実のなる木を植えることもどうか。
・ミュージアムを作っても外部から人が来るのか。散居村を見たいとか上平村に行きたいという人はわずかだ。
・カイニョを維持することは大変な費用と時間のかかることだ。
・この際、カイニョの枝はある程度整理することはどうか。
・倒れた木は家で利用する計画をしていくことだ。また、いつも来てもらう業者に始末してもらう方がよい。
・カイニョで生かされていると思うと、災害のお金だけでは推し量れない。
・被害を受けなかったカイニョを調べ、そこから学ぶことだ。
・散居と屋敷林がなぜここに残っているのか考え「文化」として引き継ぐ役目がある。
・個人の好みや時代の求めを入れた変化はあってもスギをゼロにはしないで大事にしたいものだ。
・外部からの支援や行政の指導もほしい。
・募金には賛成できない
・スギは健全だったらどんな根をはるのか、倒れた土地に植えたらどうなるのか。地下水の低いところと高いところの違いはあるか。
・ミュージアムはこの場で出た声や悩みに答え、交流できる地元民の使う場にしてほしい。
・マスコミも、カイニョと向き合っている悩みをリードする役目を果たして欲しい。
・散居の今を写真に撮り、コンクールにするとどうか。
・倒れた木の跡に植える木を用意してほしい。募金はやってもよい。助成は公平に使ってほしい。
・大きい川の近いところに倒れた木が多かった。
・スンバやケヤキで雨樋の詰まることが心配の種だ。
・今後の倒れた木を燃料として灯油に換算すると、ドラム缶 1,250 本となる。

「変容する屋敷林」

富山県自然保護協会役員　松久　卓

平成 14 年 5 月「外から見た屋敷林」という題でカイニョ倶楽部総会でお話しました時の「まとめ」に「保全のためには、屋敷林をつなぐ回廊が必要」であると申しました。ここでいう「回廊」は、単に屋敷林と屋敷林をつなぐ緑の道を意味するだけでなく、人と人あるいは村と街の交流・労力の交換、ボランティアによる手入れなど、精神的なつながりをも意味します。このように考える根底には「屋敷林は単独で存在し得るか」という命題が常に存在しています。

屋敷林のある散居の景観というのは、自然と人の営みが長い年月を経つつ相互に関わりあって形作られた現実の姿として、一つの文化を主張していると考えています。

数百年という時の経過の中で屋敷林の内容もそれが創りだす景観も変化してきたのだと思われます。したがって、現在の状況は必ずしも「動かない」ものとして静的に観る必要はなく、固定的にみてしまうことは屋敷林にとって消滅の危機をより多く包含することになるのではないでしょうか。人も物も変容するのは当然のことですが、変化しつつも先人から物心両面にわたって受け継いだものを、いかに後世に伝えるか、に主眼を置き、これからの屋敷林や回廊はどのようなものが望ましいかを模索するための調整や聞き取りが必要ではないでしょうか。